

【講演要旨】明応地震津波に関する東海地域での現地調査結果について（その2）

内田篤貴⁽¹⁾、浦谷裕明⁽²⁾、小川典芳⁽²⁾、中川進一郎⁽²⁾、武村雅之⁽³⁾、都築充雄⁽³⁾

(1) 日本物理探査株式会社 (2) 中部電力株式会社 (3) 名古屋大学減災連携研究センター

1. はじめに

1498年明応地震は、津波による被害の記述が多く残されている。本研究は、昨年度報告した（その1）に引き続き明応地震の津波被害について現地調査を実施した結果を報告するものである。今回は当時の湊やその周辺の寺院の被害の様相に着目した。

2. 経過報告

①清水（海長寺）

海長寺の被害が津波によるものかとの観点で、「日海記」に記載されている記述を精査し、津波被害について検証した。

著者である日海は、山梨県身延山において明応地震を経験しており、その数日後に海長寺に到着し、その際に目撃したと思われる海長寺の被害様相を記録している。その記述からは、明確な津波被害は読み取れず、經典も流されず残存しており、地震後に同じ地に再建していることがわかる。

海長寺には大きな津波被害はなかったと考えられるが、清水にどの程度の津波被害があったかの判断は難しい。

②焼津（林叟院）

小川港の近くにあったとされる林叟院旧地は、「海中に没した」とされており、現在も古を偲ぶ石碑が立っている。石碑には「海底に残存した山門礎石も明治41年に魚網の支障となるため爆破した」と記載されており、礎石が頑丈に残っていたことを示している。

小河湊（現小川港）について、「広報やいづ（2002）」によると、黒石川河口部の入江にあったと推定され、中世当時の湊は自然地形をそのまま利用したものであったとされる。また、焼津の地形は、河川と波浪によって形成された砂堆と砂礫洲の完新世の堆積物から構成されているため、十分な圧密を受けておらず、自然外力の影響を受けやすい地形であることから、林叟院旧地の小川湊周辺は、側方流動などの地盤変動の被害を受けやすい条件にあったと考えられる。

③浜名湖口（角避比古神社）

浜名湖口の今切の地形は、明応地震津波によって湖と海の間が切れたことにより生じたとする史料が多く存在している。

歴史家・柴田澄雄による「角避比古神社由来記」には、今切の変遷について記されている。

これによると、1405年や1475年の地震により湖口付近の地盤は徐々に変じつつあったところ、明応地震津波によって浜名湖と外海を繋ぐ浜名川は流路としての機能を失い、新たな流路ができはじめ、その後の1510

年の津波・洪水などの水害によって、外海と通じた（今切）とされている。

④津（西来寺）

津における被害記述としては、「沈めり」や「埋没」、「没滅」とされており、津波よりも、地盤の沈降によるものと思われる表現が認められる。安濃の松原の消失後の様相について、「真盛上人と西来寺」によると、江戸初期までは海中に松の梢が見えたときとされていることから、津波よりも、地盤の沈降による被害であったものと思われる。

「真盛上人と西来寺」、地元の「歴史探訪会」の資料によると、安濃の松原は、岩田川を囲うように砂嘴が形成されていたとしている。ということは、岩田川により形成された砂嘴が明応地震前までは、海側へと伸びていたものと考えられ、自然の良港として栄えていたが、地震被害により失われたこととなる。

⑤戸田（宝泉寺）

戸田宝泉寺の「当山勸請地御浜弁天略記」には「元弘年間議遷詞御濱垂松之下 無幾遭海嘯之変土地流散至」との記述があり、幾ばくもなくとの記述から、元弘年間直後の津波記事と考えることもできるが、東海側では当該時期の津波は知られていない。

⑥明応地震の日付について

明応地震の発生日について、一般的には明応7年8月25日とされているが、その他の日付の記述も多数あり、明応地震の検討には、その点に注意を要する。

明応当時に書かれた資料としては、「言国卿記」、「後法興院記」のように京都の公家による「日記」が該当する。「後法興院記」では、8月25日の地震は、去る6月11日の地震の倍の揺れであるとされている。

伊勢神宮では、大きな災害が発生すると御祈りを行っており、明応7年9月（8月25日に対応）の記録がある一方で、6月11日に対応する記録はなく、6月の地震はそれ程大きな地震ではなかったと考えられる。

三重県津における明応地震の記事は明応7年6月11日とする史料が多く、これらについて精査すると、後世に書かれたものであるとわかり、津と伊勢の距離関係、各記事の記載の類似性からも、引用の過程で、明応7年6月となってしまった可能性もあり、上記の観点で注意を要する一例である。ただし、津以外にも明応7年6月とする記述もあり、更なる検討を要する。

3. まとめ

東海地域における現地調査結果の一部を示した。今後、更に調査を進め、全体を概観した検討も行っていきたい。